

## ◇教育まちづくりフォーラム 2025（100 人会議） \_\_ 全体概要

2025 年 8 月 18-19 日に開催された「教育まちづくりフォーラム」における最終プログラム「100 人会議」の内容について、まずは当日参加者と共有したスライドや現地で行われたグラフィックレコーディングをもとに、活動の概要および共有された主な視点を整理する。

### 1. 事業の目的・位置付け

本フォーラムは、教育を学校内に限定された取組として捉えるのではなく、世代を超えて地域全体で支え合い、育てあっていく営みとして教育を再定義する、「教育まちづくり」という視点に立って開催された。

特に、フォーラム最終コンテンツの「100 人会議」は、多様な立場の参加者（町内外の方が含まれる。）が対話を通じて意見や考えを共有し、相互理解を深める場として設定したものである。

### 2. 実施内容（教育まちづくりフォーラムの概要）

本フォーラムにおける各種プログラムでは、登壇者それぞれが教育や地域との関わりについてパネルディスカッションが展開された。

特定の結論や合意形成を目的とするのではなく、登壇者の考えを可視化し、教育を軸としたまちづくりの関係性を多角的に捉えることが重視された。

#### 【主な観点】

#### （1）教育の担い手の多様化

教育は学校や教員のみが担うものではなく、子ども、保護者、地域住民、事業者、行政など、多様な主体が関わることで成り立つという認識が共有されていた。

#### （2）学びと地域生活の連続性

農業、仕事、文化、暮らしといった地域の日常が学びの場となり得ることが示され、学びが生活や地域活動と地続きであるという視点が強調されていた。

#### （3）対話と関係性の重視

意見の集約や評価よりも、対話そのものを通じて関係性を築くことが重要であるという姿勢が全体に表れた。

#### （4）行政の役割に関する示唆

行政がまちづくりの主体として前面に立つのではなく、多様な主体が関わりやすい環境や対話の場を整える役割を担う存在として描かれた。

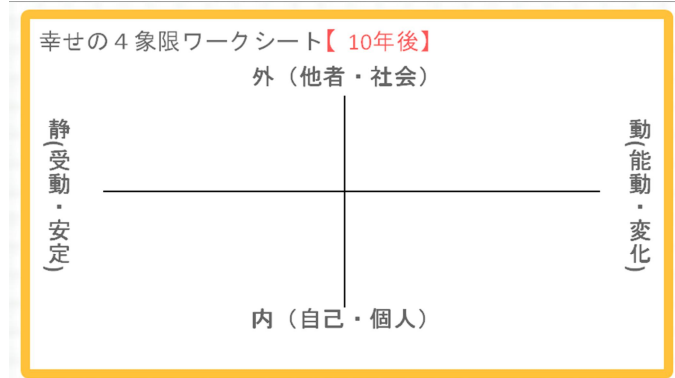


## ◇100 人会議 ワークショップ\_結果報告

2025 年 8 月 19 日開催「あびら教育まちづくりフォーラム 2025」内の「100 人会議」で実施されたワークショップに関し、当日編成された 15 グループのアウトプットを下記に整理する。

### 1. ワークショップの概要

本ワークショップは、「しあわせってどんなこと？」という問いを起点に、参加者が「10年後のしあわせ」を想像し、共有することを目的として実施された。4～名のグループに分かれ、「幸せの4象限ワークシート」を用いてブレストした。



### 2. ワークショップ結果 (4 象限別)

15 グループのアウトプットをまとめると、次のような結果／傾向が見られた。

#### ① 内×静 (自己・個人／受動・安定)

- 心身ともに健康であること
- 安心して暮らせる生活基盤があること
- 経済的不安が少ないこと
- 自分らしく、無理をせずに過ごせている状態
- 家族と穏やかに過ごせる日常
- 孤立せず、見守られていると感じられること
- 生活リズムが整い、心に余裕があること
- 年齢や立場に関わらず安心できる居場所があること

【特徴】

「頑張らなくても守られている」「不安が小さい」状態を、10年後のしあわせの土台として捉える意見が多い。

② 内×動（自己・個人／能動・変化）

- 自分のやりたいことに挑戦できている
- 学び続けられる環境がある
- 仕事や活動にやりがいを感じられる
- 新しいことにチャレンジできる余白がある
- 自分の強みや個性を活かしている
- 年齢に関係なく成長を実感できる
- 好きなこと・得意なことに時間を使っている
- 将来に希望を持っている

【特徴】

「変化できること」「選択できること」そのものが、しあわせの条件として語られている。

③ 外×静（他者・社会／受動・安定）

- 地域に信頼関係がある
- 困ったときに助け合える人がいる
- 子どもや高齢者が安心して暮らせるまち
- 誰一人取り残されない社会
- 治安が良く、災害への備えがある
- 行政や制度が信頼できる
- 子育てや介護を社会で支えている
- 安心して住み続けられる地域であること

【特徴】

「個人の努力に依存しない安心」が、地域・社会側の条件として挙げられている。

④ 外×動（他者・社会／能動・変化）

- 地域や社会の役に立っている実感
- 仕事や活動を通じた社会貢献
- 子どもを育て、次世代につなぐこと
- 地域活動やまちづくりに関われる
- 多様な人と協働できる
- 立場を超えて対話ができる
- 地域に仕事や挑戦の場がある
- 「自分もまちの一員だ」と感じられること

【特徴】

「誰かのために動くこと」「関係の中で役割を持つこと」が、しあわせとして位置付けられている。

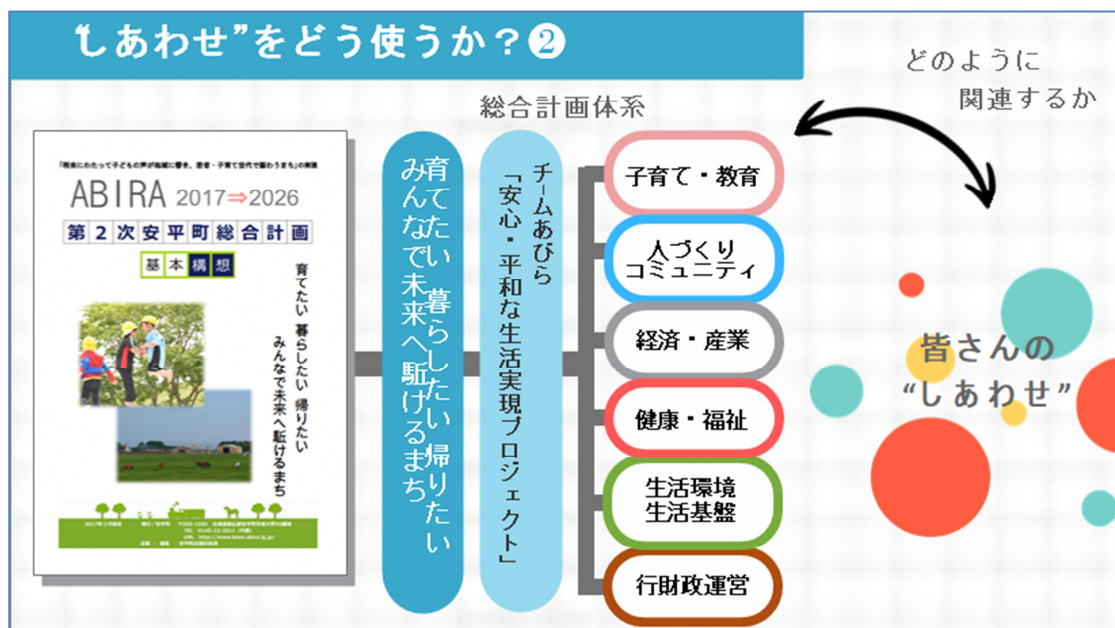
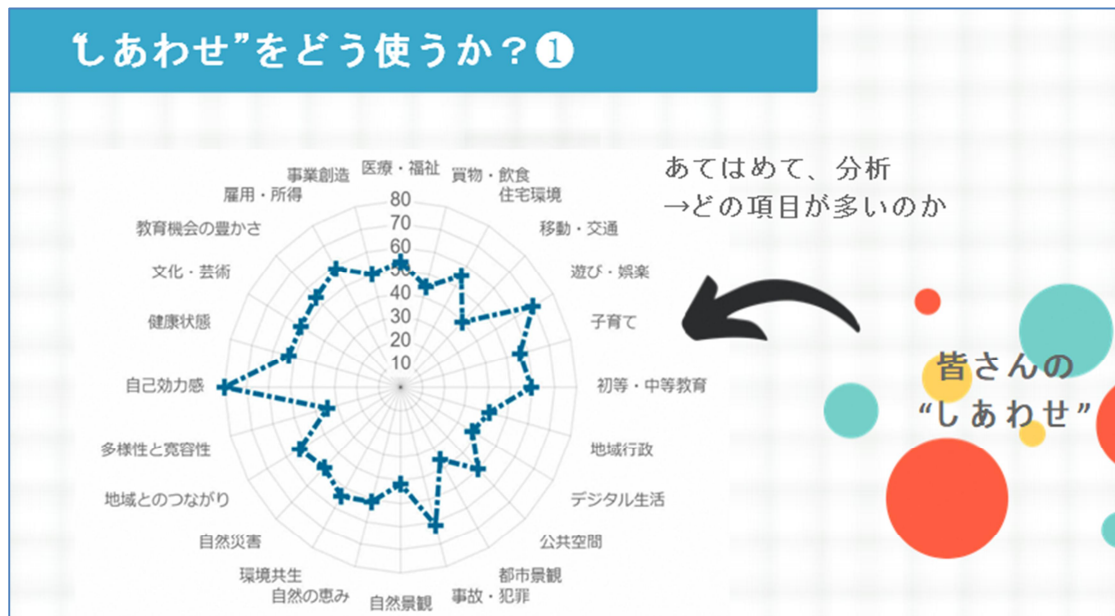
### 3. ワークショップ結果のまとめ

15 グループの意見は全体として、『個人の安心・成長』と、『社会の支え・関係性』の双方が成立している状態が、10年後のしあわせとして描かれていた。

この結果を踏まえて公共（行政）としては、多様な価値観を持つ人々が、様々な選択ができるよう土台作りを進めること／強化することが、ウェルビーイングに立脚したまちづくりの方向性が示唆されたと受け止めている。

## ◇100 人会議 ワークショップ結果 「しあわせ」 意見の分析①\_\_ Well-being 指標への分類整理

100 人会議ワークショップでは、「10 年後のしあわせ」に関する意見出してもら  
うに留め、今後、庁内において次の 2 つの作業をするための材料として受け止める  
趣旨であることを参加者に対して伝え、会議を結んだ。



### 1. 「“しあわせ”をどう使うか？①」への分類試行

そこでまずは、先述の「ワークショップ結果（4 象限別）」の①～④で出された  
（まとめられた）意見について、「“しあわせ”をどう使うか？①」に分類を試み  
た。 ※1 意見=1 カテゴリで分類を試行している。

①-④区分	WS まとめ意見	well-being カテゴリ
① 内×静	心身ともに健康であること	医療・福祉
	安心して暮らせる生活基盤があること	住環境
	経済的不安が少ないこと	雇用・所得
	自分らしく、無理をせずに過ごせている状態	医療・福祉
	家族と穏やかに過ごせる日常	子育て
	孤立せず、見守られていると感じられること	安全・安心
	生活リズムが整い、心に余裕があること	医療・福祉
	年齢や立場に関わらず安心できる居場所があること	地域とのつながり
② 内×動	自分のやりたいことに挑戦できている	自己効力感
	学び続けられる環境がある	教育機会の豊かさ
	仕事や活動にやりがいを感じられる	自己効力感
	新しいことにチャレンジできる余白がある	自己効力感
	自分の強みや個性を活かしている	自己効力感
	年齢に関係なく成長を実感できる	教育機会の豊かさ
	好きなこと・得意なことに時間を使っている	文化・余暇
	将来に希望を持っている	自己効力感
③ 外×静	地域に信頼関係がある	地域とのつながり
	困ったときに助け合える人がいる	地域とのつながり
	子どもや高齢者が安心して暮らせるまち	医療・福祉
	誰一人取り残されない社会	医療・福祉
	治安が良く、災害への備えがある	安全・安心
	行政や制度が信頼できる	地域行政
	子育てや介護を社会で支えている	医療・福祉
	安心して住み続けられる地域であること	住環境
④ 外×動	地域や社会の役に立っている実感	地域とのつながり
	仕事や活動を通じた社会貢献	地域とのつながり
	子どもを育て、次世代につなぐこと	子育て
	地域活動やまちづくりに関われる	地域とのつながり
	多様な人と協働できる	多様性と寛容性
	立場を超えて対話ができる	多様性と寛容性
	地域に仕事や挑戦の場がある	雇用・所得
	「自分もまちの一員だ」と感じられること	地域とのつながり

## 2. 分類カテゴリ別 件数一覧

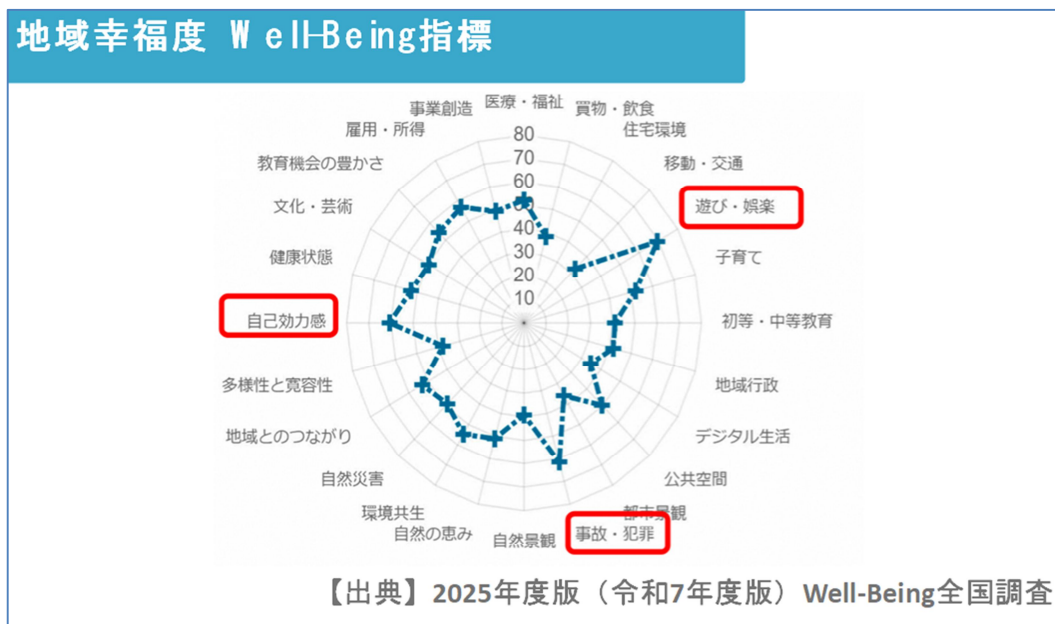
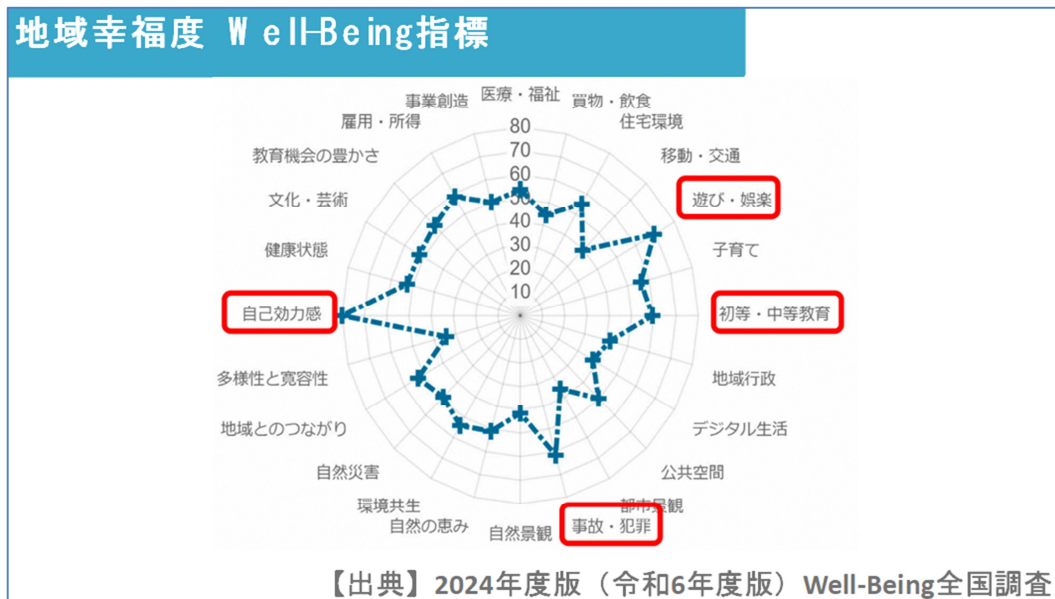
1. で試行した分類の分布は、次の通りである。

分類カテゴリ	件数	分類カテゴリ	件数
医療・福祉	6	教育機会の豊かさ	8
住環境	2	文化・余暇	1
雇用・所得	2	安全・安心	2
子育て	2	自己効力感	5
地域行政	1		

### 3. 整理上の留意点 ①関係

本件数は、ワークショップで出された各意見について、最も関連性が高いと考えられる分類カテゴリを1つ割り当てた結果である。そのため、実際には複数の分野に関係する意見も含まれているが、本整理ではレーダーチャート等による可視化を想定し、主分類のみを採用している。

また、以下は2024・2025年度に実施された「well-being 全国調査」における安平町の結果である。



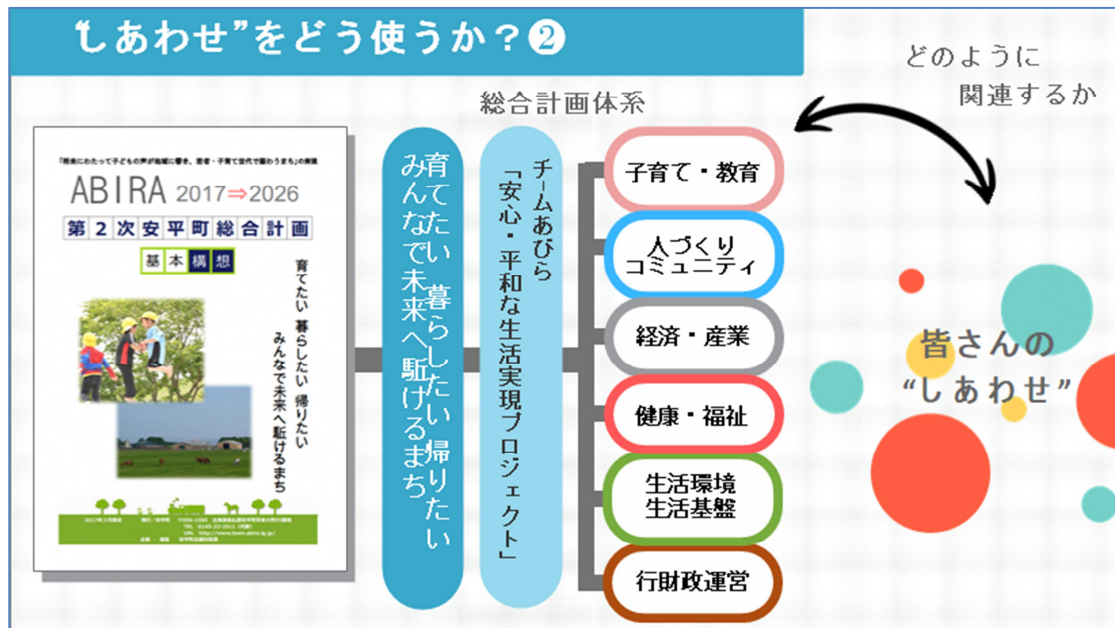
今回の4象限でのワークは換言すれば、「しあわせとは、だれのものか」【主体】と「しあわせとは、どんな状態か」【状態】を調査したということができると考えられる。よって、これを well-being 指標に置き換えた際には、「事業創造」「初等・中等教育」「移動・交通」「デジタル生活」「自然災害」「自然の恵み」など、

「しあわせのために、人々はどんな環境に身を置くか」という【条件】面が意見されにくいものであったのではないかと考えている。また、総合計画のとりわけ基本構想においては、「今がしあわせかどうか」とうことを踏まえながらも、「10年後 どういったしあわせの状態でありたいか」といった“目指す姿／将来像”を示すものであるという性質に鑑みれば、well-being 指標はあくまで“現在のしあわせ満足度”を測定するものであることに留意する必要がある。さらに付け加えれば、意見の分類は、担当者の主観によるところである（絶対的判断基準がない）点も考慮しなければならない。

## ◇100 人会議 ワークショップ結果「しあわせ」意見の分析②\_\_第 2 次総合計画政策分野への分類整理

### 1. 「“しあわせ”をどう使うか?②」への分類試行

次に、共有された「10年後のしあわせ」に関する意見と、「“しあわせ”をどう使うか?②」で示した、第2次総合計画における6つの政策分野との関係について整理・分析を行う。



### 2. 整理の目的

本整理は、行政が実施する各分野の施策が、町民一人ひとりの「しあわせ」の向上に対して、どのような役割（＝土台づくり）を果たしているのかを明確にすることを目的とする。

### 3. 前提となる考え方

100 人会議で描かれた「しあわせ」は、医療・福祉や教育といった単一の行政分野に直接対応するものではなく、複数の分野が重なり合うことで生まれる状態や実感として捉えられている。事実、① 1. の分類表へはいくつもの well-being 指標カテゴリにまたがると解釈できるものが多数見受けられる。

そのため、本整理では「しあわせを分野に分類する」のではなく、「行政分野が、どのしあわせの土台を支えているのか」という視点で関係性を試行する。

※ 1 意見 = 1 分野で分類を施行している。

#### 4. 現行総合計画政策6分野と、支えている「しあわせ」の関係

政策分野	WS まとめ意見
子育て・教育	<p>学び続けられる環境がある            年齢に関係なく成長を実感できる            将来に希望を持っている            自分のやりたいことに挑戦できる            新しいことにチャレンジできる余白がある            好きなこと・得意なことに時間を使えている            子どもを育て、次世代につなぐこと</p>
人づくり・コミュニティ	<p>孤立せず、見守られていると感じられること            地域や社会の役に立っている実感            「自分もまちの一員だ」と感じられること            自分らしく、無理をせずに過ごせている状態            年齢や立場に関わらず安心できる居場所がある            困ったときに助け合える人がいる            子どもや高齢者が安心して暮らせるまち            地域活動やまちづくりに関われる            多様な人と協働できる            立場を超えて対話できる            地域に信頼関係がある</p>
経済・産業	<p>経済的不安が少ないこと            仕事や活動にやりがいを感じられる            自分の強みや個性を活かしている            仕事や活動を通じた社会貢献            地域に仕事や挑戦の場がある</p>
健康・福祉	<p>心身ともに健康であること            家族と穏やかに過ごせる日常            誰一人取り残されない社会            生活のリズムが整い、心に余裕があること            子育てや介護を社会で支えている</p>
生活環境・生活基盤	<p>安心して暮らせる生活基盤があること            安心して住み続けられる地域であること            治安が良く、災害への備えがある</p>
行財政運営	<p>行政や制度が信頼できる</p>

## 4-2. 現行総合計画政策6分野と、支えている「しあわせ」の関係②

4. 1意見＝1分野で作業をするとやはり well-being 指標へ分類した時と同様にいくつかの分野にまたがると解釈できるものが見受けられる。そこで、当該分野に該当となる「しあわせ意見」を制限なく分類してみることにする。

※1意見＝複数分野（最大6分野すべて）

政策分野	WS まとめ意見
子育て・教育	<p>心身ともに健康であること            家族と穏やかに過ごせる日常            孤立せず、見守られていると感じられること            生活のリズムが整い、心に余裕があること            年齢や立場に関わらず安心できる居場所がある            自分のやりたいことに挑戦できる            学び続けられる環境がある            活動にやりがいを感じられる            新しいことにチャレンジできる余白がある            自分の強みや個性を活かしている            年齢に関係なく成長を実感できる            好きなこと・得意なことに時間を使っている            将来に希望を持っている            子どもが安心して暮らせるまち            誰一人取り残されない社会            子育てを社会で支えている            地域や社会の役に立っている実感            活動を通じた社会貢献            子どもを育て、次世代につなぐこと            地域活動やまちづくりに関われる            多様な人と協働できる            立場を超えて対話できる            地域に挑戦の場がある            「自分もまちの一員だ」と感じられること            行政や制度が信頼できる</p>
人づくり・コミュニティ	<p>心身ともに健康であること            安心して暮らせる生活基盤があること            自分らしく、無理をせずに過ごしている状態            家族と穏やかに過ごせる日常            孤立せず、見守られていると感じられること            生活のリズムが整い、心に余裕があること            年齢や立場に関わらず安心できる居場所がある            自分のやりたいことに挑戦できる            学び続けられる環境がある            活動にやりがいを感じられる            新しいことにチャレンジできる余白がある            自分の強みや個性を活かしている            年齢に関係なく成長を実感できる           好きなこと・得意なことに時間を使っている            将来に希望を持っている</p>

地域に信頼関係がある  
困ったときに助け合える人がいる  
子どもや高齢者が安心して暮らせるまち  
誰一人取り残されない社会  
子育てや介護を社会で支えている  
安心して住み続けられる地域であること  
地域や社会の役に立っている実感  
活動を通じた社会貢献  
子どもを育て、次世代につなぐこと  
地域活動やまちづくりに関われる  
多様な人と協働できる  
立場を超えて対話できる  
地域に挑戦の場がある  
「自分もまちの一員だ」と感じられること  
行政や制度が信頼できる

## 経済・産業

心身ともに健康であること  
安心して暮らせる生活基盤があること  
経済的不安が少ないこと  
自分らしく、無理をせずに過ごせている状態  
家族と穏やかに過ごせる日常  
生活のリズムが整い、心に余裕があること  
自分のやりたいことに挑戦できる  
学び続けられる環境がある  
活動にやりがいを感じられる  
新しいことにチャレンジできる余白がある  
自分の強みや個性を活かしている  
年齢に関係なく成長を実感できる  
好きなこと・得意なことに時間を使っている  
将来に希望を持っている  
地域に信頼関係がある  
困ったときに助け合える人がいる  
誰一人取り残されない社会  
行政や制度が信頼できる  
子育てや介護を社会で支えている  
安心して住み続けられる地域であること  
地域や社会の役に立っている実感  
仕事を通じた社会貢献  
地域活動やまちづくりに関われる  
多様な人と協働できる  
立場を超えて対話できる  
地域に挑戦の場がある  
「自分もまちの一員だ」と感じられること

## 健康・福祉

心身ともに健康であること  
安心して暮らせる生活基盤があること  
経済的不安が少ないこと  
自分らしく、無理をせずに過ごせている状態  
家族と穏やかに過ごせる日常

孤立せず、見守られていると感じられること  
生活のリズムが整い、心に余裕があること  
年齢や立場に関わらず安心できる居場所がある  
自分のやりたいことに挑戦できる  
学び続けられる環境がある  
仕事や活動にやりがいを感じられる  
新しいことにチャレンジできる余白がある  
自分の強みや個性を活かしている  
年齢に関係なく成長を実感できる  
好きなこと・得意なことに時間を使っている  
将来に希望を持っている  
地域に信頼関係がある  
困ったときに助け合える人がいる  
子どもや高齢者が安心して暮らせるまち  
誰一人取り残されない社会  
行政や制度が信頼できる  
子育てや介護を社会で支えている  
安心して住み続けられる地域であること  
地域や社会の役に立っている実感  
活動を通じた社会貢献  
子どもを育て、次世代につなぐこと  
地域活動やまちづくりに関われる  
多様な人と協働できる  
立場を超えて対話できる  
「自分もまちの一員だ」と感じられること

#### 生活環境・生活基盤

心身ともに健康であること  
安心して暮らせる生活基盤があること  
経済的不安が少ないこと  
自分らしく、無理をせずに過ごせている状態  
家族と穏やかに過ごせる日常  
孤立せず、見守られていると感じられること  
生活のリズムが整い、心に余裕があること  
年齢や立場に関わらず安心できる居場所がある  
地域に信頼関係がある  
困ったときに助け合える人がいる  
子どもや高齢者が安心して暮らせるまち  
誰一人取り残されない社会  
治安が良く、災害への備えがある  
行政や制度が信頼できる  
子育てや介護を社会で支えている  
安心して住み続けられる地域であること  
地域や社会の役に立っている実感  
仕事や活動を通じた社会貢献  
地域活動やまちづくりに関われる  
多様な人と協働できる  
立場を超えて対話できる  
「自分もまちの一員だ」と感じられること

## 行財政運営

「行政や制度が信頼できる」  
を中心に、すべての意見に基づき、町民のみなさんの  
のしあわせの土台づくりとしての福祉の増進が私たち  
地方公共団体の使命である。

分野	分布件数	分野	分布件数
子育て・教育	25	健康・福祉	30
人づくり ・コミュニティ	31	生活環境 ・生活基盤	22
経済・産業	26	行財政運営	32

## ◇100 人会議における「しあわせ」意見の整理\_\_まとめ／考察

### 1. これまでの整理の経過

以上で見てきたように、100 人会議ワークショップで得られた『しあわせ』意見を起点に、国が示す well-being 指標や第 2 次（現行）総合計画に掲げる政策 6 分野との関係性について整理を試みた。

well-being 指標への整理（分類）に関しては、今回のワークが「しあわせとは、だれのものか」【主体】と「しあわせとは、どんな状態か」【状態】を調査し、「しあわせのために、人々はどんな環境に身を置くか」【条件】という視点が問われなかったことにより、「事業創造」「初等・中等教育」「移動・交通」「デジタル生活」「自然災害」「自然の恵み」などの意見されにくいものであった。

第 2 次（現行）総合計画に掲げる政策 6 分野との関係性について整理に関しては、各意見を 1 意見＝1 分野の分類に加え、1 意見＝多分野に分類して件数集計を行った結果、ほぼ全ての分野に横断的に関連する事実が浮かび上がったように捉えられる。

### 2. 分類の限界

これらの分析を通じて明らかになったのは、次の構造が見えてきたということだと考える。

①今回のワークが人々の考える well-being の状態がどのようなものであるのかという一端を確認することができたものの、国が実施する well-being 指標とは必ずしも尺度が一致しないということ

②政策 6 分野への分類は、人々のしあわせを“1 対 1”で対応づけようとするとう違和感や無理が生じることが確認されたこと、“1 対多”では多くの分野での重複が確認されたことから、その政策分野が本来『その政策を実施するための手段』を整理するための枠組みであって、人々が描く『しあわせ』は『状態・実感・経験』として分野横断的に存在するということ

### 3. 発想の転換：分野は「土台」

当初は、『しあわせを行政分野に分類できないか』という仮説のもとワークを設計したが、見出された結果から政策 6 分野が町民のしあわせを直接生み出すものではなく、それを下支えする基盤・環境整備として位置づけられる、つまり『各行政分野は、どのしあわせの土台を支えているのか』という発想が必要ではないかと考えられる。

### 4. しあわせの再整理（5 つの上位分類）

この考え方に立てば、参加者の描いたしあわせを俯瞰し、ある程度収斂させ、政策分野の上位に置く（上位概念とする）ことが妥当であると考えた。

例えば、次のようなものが考えられる。

- ① 安心して生きられるしあわせ（健康・安心・取り残されない）
- ② 自分で選び、成長できるしあわせ（学び・挑戦・希望）
- ③ 役に立ち、つながっているしあわせ（役割・貢献・居場所）
- ④ 暮らしを楽しめるしあわせ（余白・日常・家族・楽しさ）
- ⑤ 自然・地域とともにあるしあわせ（環境・循環・土地との関係）

## 5. 総合計画における表現の可能性

これら5つのしあわせを総合計画の上位概念にしようとする場合、どのような位置づけが適切か。この5つの性質を鑑みたとき、町民の皆さまにお伝えした広報あびら11月号の内容とミッション・ビジョン・バリュー（MVV）が想起される。

▶以下、広報あびら11月号「総合計画」ページからの抜粋

### 自治体（地方公共団体）の役割

安平町（地方公共団体）の存在を規定する「地方自治法」という法律の中に、地方公共団体の“役割”が書かれています。

#### 【地方自治法 第1条の2 第1項】

地方公共団体は、住民の福祉の増進を図ることを基本として、地域における行政を自主的かつ総合的に実施する役割を広く担うものとする。

この役割を達成することが、安平町（地方公共団体）としての“目的”ということになります。

### 住民の福祉

ここでいう「福祉」とは、いったいどういう意味なのでしょう。地方自治法には意味が直接書かれていないため表現の仕方はさまざまですが、おおむね次のとおりと理解されています。

#### 【福祉の意味】

心身ともに健康で、安心して、自分らしく暮らすことができるよう、社会全体で支えること。



### Well-being（ウェルビーイング）

この言葉を聞いたことがあるでしょうか。WHO（世界保健機関）では、50年以上前からこの考え方に着目して取り組みが進められてきました。

SDGs（持続可能な開発目標）という国際連合が定めた世界共通の具体的な目標を実現するための中心的理念にも掲げられています。また、日本政府としても、各種計画や指標づくりの中で重視されるべき考え方として取り入れられています。

#### 【ウェルビーイングの意味】

身体的にも、精神的にも、社会的にもできるだけ良いとされる状態のこと。

## まとめ 第3次総合計画で大切にしたい考え方

「福祉」と「ウェルビーイング」は、端的に表現すれば住民の皆様の「幸せ」につながりますが「幸せ」のかたちは人それぞれです。その多様な「幸せ」のかたちを追求できるような土台作りが「まちづくり」であり、その設計図が総合計画だと捉えています。

この総合計画の策定を義務付ける「町の憲法」といわれる「安平町まちづくり基本条例」には、次のような目的が明記されています。

### 【安平町まちづくり基本条例第1条】

この条例は、安平町におけるまちづくりの基本原則を明らかにするとともに、町民、議会、町及び職員の責務並びに町政運営の基本的事項を定めることにより、**町民自ら考え行動する町民自治の実現**を目的とします。

第3次総合計画は、多様な価値観を持つ町民の皆さんが求めるさまざまな形の「幸せ」を実現し、安平町で安心、安全に暮らせることを目指すための計画です。

### ▶ミッション・ビジョン・バリュー (MVV) について

ミッション=Mission 、ビジョン=Vision 、バリュー=Value

MVVとは、組織や取り組みの「軸」を整理する考え方です。  
ミッションは「なぜ存在するのか」、  
ビジョンは「どんな未来を目指すのか」、  
バリューは「そのために何を大切に行動するのか」を示す。

社会課題が複雑化し、正解が一つではない時代においては、個々の施策や事業の前に、判断の拠り所となる共通の考え方が不可欠。  
MVVを共有することで、関係者の判断や行動に一貫性が生まれ、目的から外れない取り組みが可能となる。

広報11月号で示した通り、『住民の福祉の増進を図ること』が地方公共団体の“ミッション”であることは揺るぎない。そして、次期総合計画ではwell-beingの考え方を大切にしたいという方向性や今回のワークを踏まえれば、まさに上記5つの区分が“ビジョン”に相当するということになり得る。また、まちづくり基本条例に規定される理念『町民自ら考え国道する町民自治の実現』に加えて、これまで当庁が大切にしてきた『C F C I』（子どもにやさしい=すべてのひとにやさしい）や『SDGs』（だれ一人取り残さない）が“バリュー”に適するものと考えられる。

整理すると次の通りとなる。

【ミッション = なぜ存在するか】※地方自治法より

**町民の皆さまの福祉（しあわせ）の増進を図る。**

【ビジョン＝どんな未来を目指すのか】※well-being

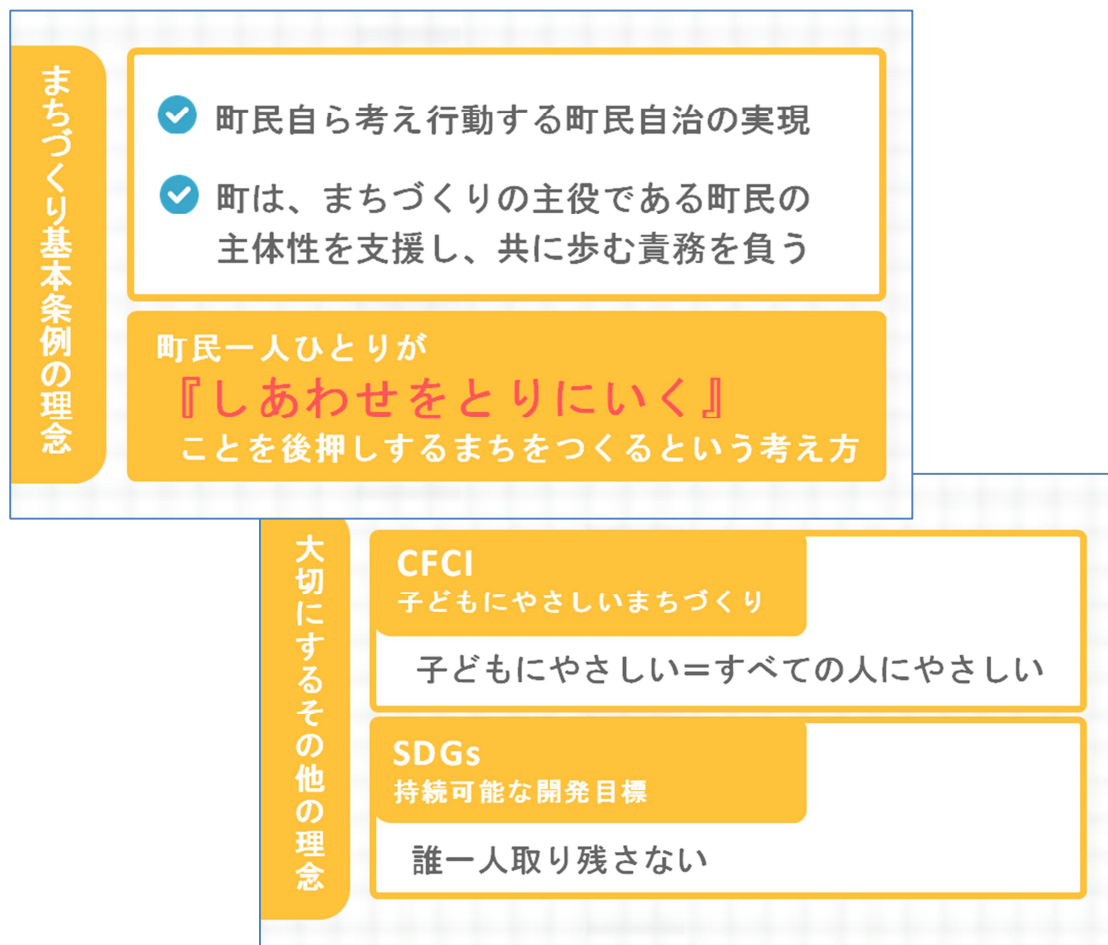
次の5つのしあわせを町民の皆さまが実現できることを目指す。

- ① 安心して生きられるしあわせ（健康・安心・取り残されない）
- ② 自分で選び、成長できるしあわせ（学び・挑戦・希望）
- ③ 役に立ち、つながっているしあわせ（役割・貢献・居場所）
- ④ 暮らしを楽しめるしあわせ（余白・日常・家族・楽しさ）
- ⑤ 自然・地域とともにあるしあわせ（環境・循環・土地の関係）

【バリュー＝なにを大切に行動するか】※まちづくり基本条例・CFCI・SDGs

- ・町民の皆さま一人ひとりがのしあわせを掴みにいくことを後押しする。
- ・“みんなにやさしいまちづくり”で、誰一人取り残さない。

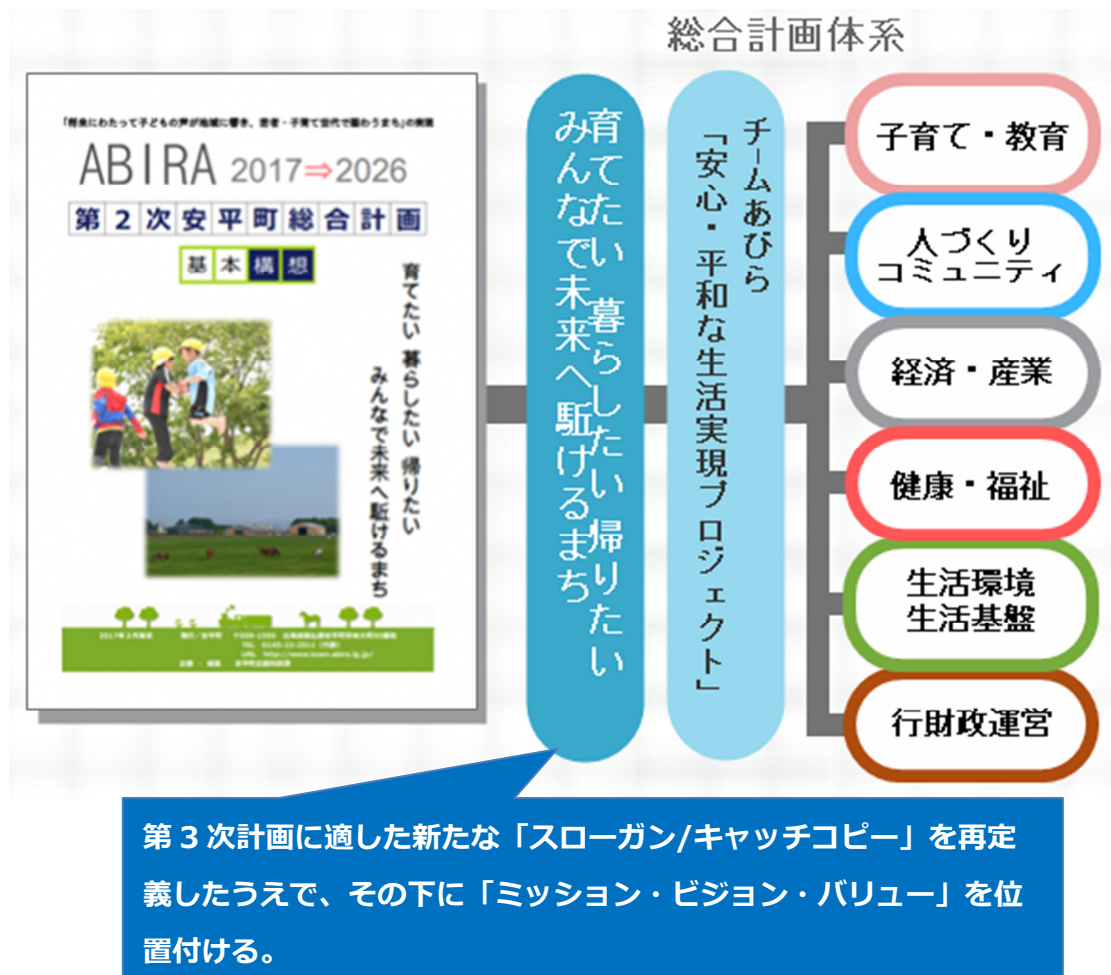
▶100人会議で参加者へ説明したスライドからの抜粋



## 6. まとめ

これらミッション・ビジョン・バリューの下に、6分野の政策がぶら下がる構造とすることで、行政の縦割り構造を維持しつつ、町民の実感に沿った『横断的な価値構造』を示すことが可能になると考えられる。

【イメージ】



つまりこの構造により、職員にとっては自らの業務の意味を再確認する枠組みとなり、町民にとっては計画を『自分ごと』として理解しやすくする効果を期待したい。

さらに換言すれば、『行政の仕事は縦割りであるが、人々のしあわせは横断的である』という前提を、総合計画を通して町民の皆さまと共有する、総合計画を共通言語とすることが重要なのではないだろうかという仮説を得た。

5つのしあわせを軸に、政策分野がその育む土台として再定義する構造は、安平町らしい新たな総合計画の方向性を示す有効な整理であり、今後の計画策定における検討において重要な考え方の一つとして位置づけていきたい。